座談会

京都大学　教授
神吉紀世子
Kiyoko KANKI / Kyoto university

京都大学　講師
小見山陽介
Yosuke KOMIYAMA / Kyoto university

本座談会で発言する編集委員

山井：本座談会のファシリテーター
佐藤：「虚構と現実の境界を見る」の編集委員
岩崎：「境界をつくる布地」の編集委員
若松：「定住するノマド、揺れる境界」の編集委員
宇野：「定住するノマド、揺れる境界」の編集委員
高橋：「定住するノマド、揺れる境界」の編集委員

本座談会は本誌におけるインタビュー企画（虚構と現実の境界を見る / 境界をつくる布地 / 定住するノマド、揺れる境界）を踏まえ、本学の教員である神吉紀世子教授と小見山陽介講師のお二人と本誌編集委員で行われたものである。先生方にインタビュー企画の記事を読んでいただいた上で担当者がプレゼンテーションを行い、それから議論が行われた。様々な方の意見を踏まえ、今一度本誌のテーマである「今、境界をつくるということ」を建築文化の視点から見直す座談会となっている。

2022.11.6　京都大学　桂キャンパス 213 ゼミ室にて

はじめに

山井　本誌のインタビューから出てきたキーワードやトピックなどから、連想して話を膨らませていこうと思います。まず初めに先生方の考えをお聞かせください。

「境界というのは、皆が共有しやすいテーマ / 境界が取り払われたとしてもそこに残る物理的な距離も顕在化している」

小見山　境界というのは、皆が共有しやすいテーマだと思いました。異なるバックグラウンドの方たちであるけれど、同じ目線で境界について話ができているのはテーマ設定がよかったからだと思います。建築における境界というといくつか思い出したことがあります。僕が大学で指導を受けた難波和彦先生の事務所名「界工作舎」には「境界の工作」という意味が込められています。また、僕が大学時代に聞いた北山恒さんのレクチャーでは、「境界に立て」と言われたことが印象に残っています。境界をつくることが建築をつくることであるとか、境界線上に立つ姿勢が重要であるといったことは、僕が学生の時から聞いていたくらい建築において普遍的なことですが、未だに議論のテーマとして有効なのだと思いました。
一方で、境界ということと、距離が離れているということは、違うことだと思います。僕は最近、距離について考えることがあります。境界を横断して考えたいと思うけれど、物理的な距離があったりとか。境界がそこにあるか無いかということに関わらず、単純に距離が離れていて、なかなかコミュニケーションが取れないということもあります。
例えば、平野先生のお話の中に出てくる「境界が顕在化してくる時代」[1] とは、ベルリンの壁は崩壊したけれど、アメリカとメキシコの国境に壁が立てられたりという現代の状況を想像させます。それだけでなく、国境を超えてインターネットでつながったと言ってもやはり時差があるだとか、離れた場所の人に直接会うのは難しいといったような距離による隔たりは依然としてあります。むしろインターネットの普及などでより遠くの人とつながることができるようになったことで、そういった距離による隔たりをより意識するようになったと僕は思っています。つまり境界が顕在化しているということに加えて、境界が取り払われたとしてもそこに残る物理的な距離も顕在化しているわけです。

「狭い範囲の話をしている」

神吉　今回はものをつくる立場にある人たちにインタビューをしていますが、それは社会の本当に珍しい人たちだけに焦点をあてているように感じます。例えば、ノマド的生活ができるのは、誰かが道などのインフラを整備してくれているおかげですよね。「定住するノマド、揺れる境界」のプレゼンテーションの中で安全という言葉が出てきていたけれど [2]、安全は自然と生み出されるものではないので、実はノマド的生活をする人の背景にはインフラを支える多くの人たちが必要となります。ですから、全員がノマド的生活をすることはできません。そうすると、やはり今回のインタビューで出てくる話というのは、社会的に選ばれた人のことだけを取り上げているのではないかと思ってしまいます。
つながるドメインを持つこと自体がとても大変な人は日本にたくさんいますよね。そういうことも含めて喋るかどうかと言いますか。創作、クリエーションの範囲で話すかどうかは少し気にしておきたいです。強者の論理に少しなっている気がして。私から見るとすごく狭い範囲の話をしている感じがします。

山井　確かに、本誌のテーマは「つくること」と題していますが、それによって本誌が取り扱う対象が限定されてしまったかもしれないです。

小見山　「今、境界をつくるということ」というテーマでみなさんが考えたいのはきっと、つくることにおいて、境界をどう取り扱うかということですよね。

若松　そうですね。私たちはどのように境界をつくってい

1　本誌 p24
2　事前プレゼンテーションの中で移動生活の安全性に関する言及があった。

くのか、そして境界がどうなっていくのかという話です。私たち建築業界に携わる人とそうでない人の両方の視点から境界をつくるということについて座談会では話していきたいと思っています。まずは先生方が境界というものに対してどう感じたか、また、どう関わっていくかについてお伺いしたいです。

「Y 軸はどうなっているんだろうということを今回の企画では探しに行っているような気がしています」

神吉　各班のインタビューの中で境界が必要か否かといった話が出てきていたので一つ言っておくと、一般的に世の中は二元論である、つまり背反する二つの要素で構成されているとよく言われます。その方が一軸的な議論ができてインパクトもあり面白いからです。しかし、おそらく世の中はそんなに単純ではないと思うんですよね。例えば切れているかつながっているかを考えた時に、どれだけ議論したとしても結局どちらもあるから、あまり生産的ではないんです。つまり二元論的な議論をしても、自分にとって都合のいい結論に落ち着くだけだと思うんです。
X 軸に対して Y 軸をどうするかと考えることで、四象限がつくれる、つまり世の中を 4 つに分けることができます。その観点からどっち寄りかというふうに散布図的に見る、というふうに考えたら、Y 軸はどうなっているんだろうということを今回の企画では探しに行っているような気がしています。やっぱり、自分と違う人の話を聞くことはそういうことだと思います。

インタビュー企画を受けて

山井　ありがとうございます。先ほど小見山先生のコメントの中で平野利樹さんのお話が少し出ましたが、「虚構と現実の境界を見る」のインタビューの中で出てきた平野さんの作品[3]について小見山先生から意見をいただきたいです。

「モノとその情報を行き来することによって、だんだん最初のものが変化していくことを、必ずしもネガティブなことではなく捉える」

小見山　僕は平野先生の作品における「解像度」がとても面白いと思いました。確かこれは日本で制作されたそうですが、それをロンドンに持っていくために飛行機に乗る大きさに分割しないといけないという条件があって、物理的に分割されてもつながっているようにつくりたかったと以前お聞きしました。平野先生はデジタルとアナログという言葉を使われていますが、気体から液体という相転移とも似た話ではないかと思いました。平野先生はおそらく、様態の異なる情報と物質を行き来させることの面白さに取り組まれているのだと思います。平野先生は劣化や欠落など「減っていく」ような言葉遣いをされていますが、画像データの加工のことを連想しました。例えば昔は jpg 画像を回転させていくと、どんどん解像度が下がっていったんですよ。画像を 360 度回すと、画質が最初よりも荒くなっていて、え？みたいなことがありました。加工をすると、情報がどんどん失われていってしまうという基本的な考え方があった上で、平野先生の場合は、欠落と言いながら、その欠落したものが、また何か別のものによって埋まっていくということをたぶん想定されているのかなと思っています。転移することでものがどんどん劣化していくだけではなくて、むしろ欠損を埋めることに豊かさを見出しているのだと想像しました。
それは僕のやっている研究に絡めても、とても共感する部分があります。僕は 19 世紀に建設されたクリスタル・パレスの図面記録の研究をしています[4]。万国博覧会のために

3　本誌 p24

建てられた仮設建築ですが、竣工と同時に図面集が出版されました。その後にクリスタル・パレスを模したりあやかったりした建築が世界中に建てられるのですが、部材が再利用されていたり設計者や施工者が共通しているなど物質的なつながりが認められるものだけでなく、図面集を見てつくったのではないか？イメージだけが伝わったのではないか？と思えるような一見何の関係もなさそうな場所で建てられたものもあります。オリジナルは移動してなくて、オリジナルを書き起こした図面だけが別の国に運ばれて、その図面を元に誰かが建築物をつくったということもあったのではないか。これは、一旦物質だったものが図面という情報になって、その情報をまた物質化するという相転移が二回起きているのですが、その結果として、オリジナルと後に建てられた模倣品では細部が違っていたりするんです。情報が欠落して、あるいは誰かが意図的にオミットしてしまって、その欠落に受信者が自分なりの解釈を加えてつくったから、結果的に違うものが出来ているということです。この情報の加工を経て最初よりもむしろ良いものが出来ている事例もあって、そういうものを最近は調べたりしています。モノとその情報を行き来することによって、だんだん最初のものが変化していくことを、必ずしもネガティブなことではなく捉えるというのは、僕も歴史研究のなかでとても共感するところがあって、それを現在進行形で平野先生は試されているのかなというふうに思いました。だから、平野先生は今のこの情報化が進んだ時代の状況から、何か自分がやるべきクリエーションの方向性を見出して、それをドライブしているという意味では、とても現代的な活動をされてる方だなと僕も同世代として思います。平野先生の場合は、特に「境界をつくる」という言葉では意識してやっていないかもしれないけれど、つくるという自分のクリエーションにおいて、境界をどう取り扱うかということについては、すごく明確なコンセプトを持っている方だと感じました。

山井　確かに、解像度という切り口で見たら面白いなというのはお話を聞いていて思いました。ディズニーってアニメ作品もディズニーランドもあるじゃないですか。ディズニー世界の写像として、アニメ作品の方が解像度が高いのか、それともディズニーランドの方が解像度が高いのかと言われたら難しいですが、それはたぶんそれぞれの本物性があるからだと思います。

「実はつくる以上に、変え方とか、辞め方とか、見直し方とかの方が大事だと私は思っています」

山井　「定住するノマド、揺れる境界」のインタビューを行った高橋さんはどういう風に解釈しましたか。

高橋　彼ら二人、さらには柳沢先生にも共通しているのが、現在の日本の住宅の流通システムに不満を持っているということでした。というのも、賃貸で部屋を借りるとなってもどの部屋も似たり寄ったりで、個々の性格が薄く、また退去するときには完全に元の状態に戻すという制度が敷かれているという点ですね。制度によってその性格が固定されているという印象を受けました。

神吉　うん、これは日本で見られます。制度って、そのときの状況に合わせて案外、瞬間風速的にもつくられているから、あっという間に状況に合わなくなるという場面にはいつも直面しますね。でも実はつくる以上に、変え方とか、辞め方とか、見直し方とかの方が大事だと私は思っています。その意識が共有されていないのが現状ですが .....。制度を守るために世の中が動くことを期待する側面があって、制度が正当であることを保証するように物事を動かす。つまり制度の方が強いんですよね。だけど制度はあくまでも、その時良かったものを基準にしてつくっていて、そこから外れるものは世の中にたくさんあります。そのため外れるものを前提にカスタマイズすることはむしろ重要なのと、日本の制度は割に共通部分の制度を守る方向で動いていることは現実ですね。線を引いてしまって消せなくなることの怖さも考えておかないといけないんです。
ではどう変えるかについてですが、制度や線引きに合わなくて困ってる人が「多数」だから変えましょう、というのが制度的に理由が説明がしやすい発想です。しかし、これは少数の状況や特別な特色を持っているある地域を無視す

4 「「鉄とガラス」のクリスタル・パレスにおいて木材が果たした役割」traverse 19 所収

ることを暗に内包しますよね。でもそれは本当はおかしいじゃないですか。制度は、少数に対しては特例を認めるというスタイルでなんとか調整していますが、特例というのも難しいもので、重大な問題が生じるような全然違う方向に特例を活用することも起こりえる。そう考えると、制度をつくる背景としてマジョリティが規範になるアプローチには、議論の余地がありますね。

「日本の場合は新しい制度をつくる際に危険性がないかをすごく気にする」

山井　小見山先生は昨年桂キャンパスに建設された実験住宅[5]のように、住宅というテーマのなかでポータブルな建築や可動的な建築に興味を持っていらっしゃるように感じました。住宅は固定しているという話に対して、なにかご意見はありますか。

小見山　僕はドイツ留学時代の先生が移動可能な住宅の研究をされていた[6]ということもあって、定住しない生活に憧れています。その先生は週の前半、月曜から水曜のお昼まではミュンヘン工科大学で教えていて、ミュンヘン市内の学生寮の庭に 2.6m 角の小さな庵のような直方体の家を作って、そこで生活していました。水曜の午後から金曜まではロンドンの事務所で仕事をしていてロンドンのアパートに住んでいることになっていたけれど、実際はロンドンの彼女の家に居候しているのではないかという噂もありました (笑)。週末の土日は、イギリスの郊外にあるプールという海辺のまちで、自分の両親から引き継いだ土地に建てた海辺の豪邸で子供たちと暮らしていました。どれかを諦めればもっと簡単に暮らせるのでしょうけど、彼は全部の生活を両立させるために自分自身がどんどん移動するという生活をしていました。
そういう生活はすごく面白いと思います。彼が設計した小さな家「micro compact home」は、自分が住みたい場所に住めるようにするために、とにかく建築を小さくするというコンセプトでつくられているから、まさにポータブルな住宅ですよね。彼が大学でやっていた研究の多くは気軽に「運べる」ことが重要な条件の一つだったので、車の上に積んで運べる家もありましたね。渡鳥さんのバンライフもバンを自分でカスタムしてやっているんですよね？自分が動かせるくらいの小さな空間を工夫してつくられているところがすごく面白いなと思いました。

神吉　地域によっては車中泊をするキャンパーは結構いますよね。例えば和歌山は暖かくて厳冬があまりないので、キャンプを楽しむ人が多いですよ。そして彼らはものすごく身軽に上手にやるんですよね。

小見山　それが文化として成立しているから不審者とは思われない訳ですね。

神吉　思われないですね、いっぱいおられるので。(笑) 地域人口が少なければ大体人の見分けがつくのでキャンパーが不審者とは思われないです。日本の場合は新しい制度をつくる際に危険性がないかをすごく気にするので、安全性という切り口で除外されるともうなかなか新しい制度をつくれないんですよね。制度がいつか変わるだろうと待つのではなくて、主体的にやっていかないと現状はなかなか変わらない気がします。

「境界をつくることで、隔てると同時につないでいる」

山井　ありがとうございます。次に「境界をつくる布地」について議論したいと思います。実際にインタビューをしてみて岩崎さんは何を感じましたか。

岩崎　僕としては、インタビューのなかでコーディネートという言葉がとても印象的でした。安東さんはデザイナーとコーディネーターをあえて両方とも肩書きに書いています。コーディネーターと言うと、なかには立場を下に見るような人たちもいると思うんですが、やっぱりデザインが必要な部分とコーディネート、つまり関係性をどう扱うかが大事な部分があるからこそ、デザイナーとコーディネー

5 「動く小さな木の建築」traverse 22 所収

ターという二つの肩書きにしているようです。
制度をつくる背景としてマジョリティが規範になってしまうという神吉先生の話と関係性を取り扱うコーディネートの話は似た雰囲気があるように感じました。制度がなくてもまちの人たちの自主的な活動によって人々の生活が成立しているのに、制度を設置したことでマジョリティとマイノリティがかえって生まれてしまうという都市のイメージとコーディネートが関連しているように感じて、あらためて、都市計画においてもコーディネートが重要だと思いました。
また、境界をつくることで、隔てると同時につないでいるんだという話も印象的でした。

神吉　それでいうと、切るかつなげるかという話は、実は同じ難易度で両方いけるわけではないんです。また、1 回切ってしまって 0 にしたものを完全につなげ直して 1 にすることよりも、0.1 ぐらいから 0.4 ぐらいにするみたいなあたりが実は一番難しいです。

小見山　それがテキスタイルだと気楽に切ったりつなげたりできますよね。安東さんの企画で言うと、ある意味「あってもなくてもいいもの」[7] だからこそ調整ができるということでしょうか。

神吉　そこまで読むとこれはやっぱりすごく必要だし、たぶんコーディネーションとおっしゃっているのも、外してもいいよというとこまで言っていると思うんですよね。自分のつくったものがそのうち消えてもいいよというところまで含めてというのはあるでしょうね。

「交換されることを前提として、一つの設計の視点として入れていくというのも可能なのか」

山井　「分断」や「つなぐ」、「制度」という言葉が出てきましたが、制度は社会的な境界といえるのかなとも思いました。自身のインタビューを踏まえて高橋さんは何か感じたこと、考えたことはありますか。

高橋　市橋さんは日本にいくつか拠点を持っていて、流動的に移動して生活していらっしゃる方です。建築の柔軟性もそうですが、建築物の所有と流通としての柔軟性が重要で、賃貸物件がもっと個人間で自由になったらいいのにな、という話をされていました。それが新しい視点ではないかと思ったのです。日本の物件は基本的に不動産会社が所有して、そこで交換されます。現行の日本社会では多様化の流れがあり、大きい組織や大きい社会への信頼が失われつつあることを考慮すると、物件を個人間で交換するという視点も現実的なものとして見えてくるなと思いました。このとき私は、設計者としての視点でこの社会変化に寄与すること、つまり設計によって建築物そのものの所有と流通を柔軟にすることができると考えていました。例えば建築物を一つのモノとして考えたときに、それが交換されることを前提として、一つの設計の視点として入れていくというのも可能なのかなと思ったのですが、それについて小見山先生はどう思われますか。

小見山　家が動くわけではないけど、家に住んでいる人が動いていくということですよね。最近僕も家について考えていて、それにすごく共感する部分もありながら、実際どうしたらいいのかなとも思っていました。家の交換というと、Airbnb ってもう当たり前に使われるようになりましたよね。今ではホテルの検索サイトでも Airbnb がホテルに混じってリストに上がったりします。Airbnb が出てくる前にも近い文化があって、家を交換して長期休暇中を過ごす「ホーム・エクスチェンジ」という方法が欧米にはあったそうです。全然違う土地に住んでいる人同士が何かのサービスでマッチングされて、夏休みの 2 週間家を交換して普段と違う土地で過ごすという趣向です。当然自分の持ち物も大方は置きっぱなしにしていくことになりますから、自分と違う人が生活してる場所で生活してみるということの楽しさでもあると思います。だから、休暇を使って非日常的な体験をするためということであれば、昔から似たようなものがありました。それが今はもう少しシステム化・日常化されている状態という感じです。
住宅で言うと、多くの場合、不動産会社は基本的に仲介しているだけで、本当の家の持ち主は別にいます。最近調査

6 「micro architecture」traverse 21 所収
7 本誌 p13

に行った古い家では、持ち主であるおばあちゃんが老人ホームに入られたのですが、息子さん達が全然違う場所に住んでいて、おばあちゃんの家は空き家になってしまいました。でも歴史的に価値のある建物だから、そのまま朽ち果てさせてしまうのは惜しいということで、誰か継承してくれる方を探してもらえないかという相談を受けました。でも持ち主はそのおばあちゃんかというと実際にはさらに細かく所有が分かれていて、複数の親族が共同所有しているので売るのがなかなか難しく、賃貸としての活用方法も模索しているとも聞きました。
そういうこともあるので、家は動かずにその中を人が移動していくというのは、所有権などの点でなかなか難しいところもあるのかなと思いました。

高橋　例えばマンションやアパートというのは、完全に規格化されているなかで二極化しているイメージがあるのですが、本当はもっとグラデーションになっていくといいと思うんです。例えば、数人、数十人、数世帯のなかで家を交換し続けるようなコミュニティーができるとおもしろいと思うんですがどうでしょうか。

小見山　不動産会社に勤めている友人から聞きましたが、富裕層向けには会員制でそういう暮らし方を提供するサービスがあるらしいですね。

「建築の話というよりは、所得階層、つまりお金があるかどうかの話だ」

神吉　今の話は実は建築の話というよりは、所得階層、つまりお金があるかどうかの話だと思った方がいいです。つまり、ある所得階層で上手に回すということはどういうことかを考える必要があると思うんです。お金を出せる人たちが最終的に土地を占めていく現象が特に都心部にはあります。所得階層に関しての差、そこはどうしたらいいんでしょうね。

高橋　そういうことを実現しようとすると、個人間の信頼とか、共有するものの多さが重要になってくるんですかね。
神吉　ジモティーみたいなもので出来るようになるかもしれないですね（笑）。競争率が高いと、なにか仕組みが必要になると思います。だから土地の値段が上がらなさそうな不便な所に行くと、そんなにしんどくないかもしれないです。
空き家の扱い方については皆本当に困っているんですよ。神戸市など、空き家のまま放っておくと傷んでくる等の問題があるので対策をなんとかしようと頑張ってこられているんですけれど、そういった活動がそこまで主流になりづらいのが現状です。空き家管理の問題は容易ではないので、自治体は住まいにもっと人が住んでほしいんですけどね。建築生産の前の教授の古阪先生も仰っている住宅の総量規制の必要、つまり住宅が余っている状況では新築住宅をつくるのをやめるべきだ、という意見もあります。主流を新築ではなくて、中古にブラッシュアップできないかという考え方です。しかし実際は住宅建築の業界を大幅に変動させてしまうことになるので難しいんですよね。新築をつくる疑問より、経済が縮小したときの怖さの方が大きいです。

「6 年後にどこに住んでいるのだろう」

山井　高橋さんと同じインタビューをした宇野さんは何か思ったことはありますか。

宇野　文化については教育が関係していると思っています。実際に市橋さんはちょうどお子さんが生まれたところで、これまではアドレスホッピングしていたのですが、今は長期的に住む家を探されています。今後、世帯人数などの所有が増えていくなかで、そこに教育が入ってきたときに、さらにハードルが生まれてくるのかなと思います。社会をどう変えるか、さらには自分のなかでどうハードルを超えていくかについても課題があると思います。

小見山　僕にもいま同じような悩みがありますね。次の 4 月で自分の子どもが小学生になるので、小学校の入学申し込みの書類が届いたのですが、自分は 6 年後どこに住んでいるのだろう？と考えてしまいました。

「学校の問題よりも、医療や健康などの問題の方も懸念点」

神吉　確かに子どもからすれば自己決定権が全く無い一方で、あっという間に時間が流れるとも言えますよね。最近は小中一貫校が多いですけども、9年間同じ学校に行く、一か所にいる方がしんどい子もいるかもしれないですし、子ども本人のキャラクターに合わせて状況を変えるのが本当は良いと思います。さらには、私としては学校の問題よりも、医療や健康などの問題の方も懸念点だと思います。大都市圏に行った方が医療に関しては絶対に安心できますけども、逆に人が多い所でストレスのかかる人もいます。人が大都市でも地方でも移動できるのは現代のいいところで、空き家を使わせてくれるシステムが利用できたりしますよね。

まとめ

「境界があるとしたときに何をつくれるのかという話をすることに意味がある」

山井　ご意見ありがとうございます。最後になりますが「今、境界をつくるということ」というテーマに対しての答えという点で、佐藤さんはどう思いますか。

佐藤　全体を通して、境界をつくることに言及している人は少ないように感じました。つまり「つくる」という議論に終始せずに、境界はあるものとしてその境界を超えることの可能性についての議論が多かったと思います。私たちは「つくる」ということを気にしすぎていましたが、そこに広がりはあまり無くて、境界があるとしたときに何をつくれるのかという話をすることに意味があると思いました。

山井　同じく安東さんのインタビューでも、境界をどのようにつくるか以前に、境界のあるものの関係性をコーディネートすることが取り上げられました。

岩崎　もともとある2つのものをどう扱うかというときに、ときには2つのものを分けるデザインも必要ですが、どのようにつなぐかが重要だと思います。「テキスタイル」から出た視点としては、当インタビューでは境界をつくるということに加えて、つくることの中での制約の話が出てきました。テキスタイルだと印刷するための規格が決まっていて、その中でどうやりくりするかという制約があります。

山井　お金をかけて複雑なものをつくるよりも、少ない手数でデザインできた方がおしゃれではないかという話をされていていいなと思いました。ノマドのインタビューでも、境界を積極的につくっていくというよりは、既存の境界をまたいでいくとか、ある場所で境界をつくるという話だったと思います。インタビューをしてみて、若松さんはどうでしたか。

若松　そうですね。ノマドのインタビューでは最終的には具体的にその人がどうするかという議論に収束してしまって、個人の意見次第という結論になってしまったという点は今日の話を聞いてもずっと思っていたことですね。一般化するよりも、どこかに共通項を見出していく方が広がりがあるかもしれないなと今日の議論を通じて感じました。普遍性よりも共通点という感じですね。

「誰に決定権があるのか」

神吉　個人の意見によるといえばそうなんだけど、勝手に他人につくられたくないという意見を大事にすると、誰に決定権があるのかが問題になりますよね。その場合には、決定権の範囲がいつまでなのか、どこまでなのかについてしっかり頭の隅に置いておくことが必要になりますね。さっきの制度問題についても、誰に決定権があるのかは揺れ動きますが、そこを外すと拘束状況にしかならないというのが本質だと思います。誰にとってのどういう境界なのかを、誰が決めるべきかというところに対する柔軟性が大事ですよね。

山井　境界をつくる主体と客体を意識しながらつくっていくと。

神吉　特に主体が忘れられやすく、客体的になりやすいですよね。

「境界というものは、決められて、そのなかでやらなければいけないものではなくて、自分自身でも働きかけていくことができるものになっている」

小見山　今の神吉先生の境界をつくる主体に関するところで、近年の歴史研究の動向を連想しました。日本建築史、西洋建築史のように地域ごとに分けるのではなく、グローバルヒストリーという包括的な概念が出てきています。結局そのグローバルヒストリーのなかでも何を取り上げて、何を取り上げないかは自分で線引きをしなければいけないのですが、あらかじめ与えられた線引きに沿って、では自分は○○建築史を担当しますというのではなく、研究対象の枠組み自体を自分でつくる、その境界自体を自分でつくるというのが、歴史研究のアプローチとして出てきているように思います。今回のインタビュー記事で登場された方々にも共通するような姿勢だと思います。境界はあると言えばある、無いと言えば無い。ただ、必ずしも与えられた境界のなかでやっているだけではなくて、自分で境界を定めている人たちもいると思いますし、全てはグラデーションであると思います。境界というものは、決められて、そのなかでやらなければいけないものではなくて、自分自身でも働きかけていくことができるものになっているのかなという気がしました。

「歴史性のなかで、“今”という時代性をどう相対化するか」

山井　難しい問いかもしれないのですが、そういう歴史性のなかで、「今」という時代性をどう相対化していらっしゃるんでしょうか。それこそ、自分で決めていくことができるものなんでしょうか。

小見山　今この瞬間には分からないんだろうなというふうに思う部分もあります。例えば、イギリスでは 19 世紀に建築家のための職能組織が出来た時に、建築家とは○○をする人で、それ以外は建築家ではないという線引きがされましたが、今の感覚で当時の線引きを読むと違和感が大きいです。そのように後から振り返ると、どうしてあんな線引きにしたんだろうと思うこともあります。現在進行形で行われている線引きのなかにも、しばらくしたら、「いや、そもそもそんな線引きにしたことがばかげてたね」と思えることもたぶんあると思うのですが、現在進行形でその渦中にいるとなかなか客観視は難しいと思います。逆に今、僕らが強固に存在していると思っている境界も、ちょっとしたことで無くなってしまったりするかもしれないとは常に思っています。

「線を引くというよりは、昔の運動場の白線みたいに踏んだら消えちゃう感じにしとかないといけない」

神吉　今の社会は少し昔に比べ、良くも悪くも新しい見方を獲得していますよね。その影響で昔はダメだとされていたものが今は良しとされていることが本当にたくさんあるので、否定するときに頑なになりすぎないことが大事だと思います。
そういう意味で線を引くというよりは、昔の運動場の白線みたいに踏んだら消えちゃう感じにしとかないといけないなって、最近はすごく思います。積み重ねはそんなに変わらないんだけど、これも評価に入ってくるのかと驚くようなことは結構あるんですよね。驚くけれどもそうかと受け入れて考えられるマインドセットはあった方が良いかなと思っています。

小見山　文化財保存の現場でも、なにか改修の手を加えるときには、そこで用いられた現代の技術があとから交換できるようにしておくらしいですね。今とは違う価値観、ニーズのもと次回改修される時にはそう対応できる様に。

神吉　元に戻せるように一応するんですよね。300 年に一回しか改修しないものとかは特に。30 年や 40 年くらい経つと新しい評価が見えてくるのかもしれないですね。

山井　評価が変わることを前提に、境界の消し方を考えて境界をつくるという話は面白いですね。

神吉　消し方を含めて線を引くというのはなかなか実装はしてもらえないんですけどね。勝手に物事が進んでいってしまうことがあるから。

小見山　主体性の話ともつながりますね。線を引くときはそれを消すときのことも考えておく。

神吉　本当に消したくないやつは残すっていうのもありますよね。全否定はしないけれどもやりすぎないように。

山井　議論は尽きませんが、座談会はここまでとさせていただきます。今日は長い間、本当にありがとうございました。